

古典の日絵巻 [第四卷:琳派400年]



『漁夫図扇面』尾形光琳作

第12号：平成27年4月22日 尾形光琳 —— 2

裕福な老舗の若旦那・光琳は、家の没落後、絵師の道を選んだ。素人の彼が絵で稼ぐことは大変だったに違いない。絵で有名になれたのは何故か、才能があったからと云えばそれまでだが、才能を支えたのが彼の素養だと考える。素養とは「琴棋書画」の「四藝」のことで、幼い頃からお稽古事として習っていたのが、その一つの「画」であった。その手筋の良さが現れているのが本図である。多分、宗達の扇面画を見ていたのであろう。絵を描くことを身に着けていたこと、つまり、旦那藝であり、藝が身を助けたことになる。光琳にとっての「琴」は申楽＝能である。しかし「四藝」の「琴」＝申楽の道を選択しなかった。家代々に伝わる能道具一式を相続しながら趣味の「藝」に終わった。習い事の延長であり、乾山と一緒に醍醐寺門跡の前で舞を披露したこともあり、その才能が高く評価され、能を通じて公家衆や銀座役人・中村内蔵助とも交際を深めていたが、能役者にならなかった。ここに光琳の謎の一つがある。

